

ロールシャッハ・テストに関する近年の研究動向

天 満 翔¹⁾
日 高 三喜夫²⁾

要 約

本研究の目的は、最近のロールシャッハ・テスト関連の研究動向を検討することにある。おおむね過去 10 年間にわたる心理学、精神医学関連の文献を振り返ったところ、主要な研究テーマとしては、既存のスコアリングと解釈の妥当性及び信頼性に関する研究、DSM における精神疾患やその他の疾患に関連する研究、発達障害に関連する研究が見受けられた。また、最近の研究動向としては、臨床心理学のカテゴリーから新たなカテゴリーへの応用も見られ、その幅を広げている。そして、その広がりには、時代のニーズに答える形で変化していくことなどが挙げられた。

キーワード：ロールシャッハ・テスト、スコアリング、妥当性と信頼性、発達障害

1. はじめに

ロールシャッハ・テスト (Rorschach test, Rorschach inkblot test: 以下 ロ・テスト) は今日に至るまで様々な研究が行われてきた。ロールシャッハが創始したインクの染みを用いた研究は、Klopfer や Beck をはじめ、Piotrowski, Rapaport, Exner らによってその原型を留めながら引き継がれていった。わが国では、片口法をはじめ、阪大法、名大法、包括システム (エクスナー法) などが主に用いられている。ロ・テストを用いた諸研究は、精神疾患や人格障害に限定した問題としてのみならず、質問紙では単純に計ることのできない深い人間の心性に関するものも含めて幅広く展開してきたものと予想される。病院臨床、学校臨床に留まることなく、司法、福祉など様々な領域でその適用の幅を広げている。

そこで、本稿では、ロ・テストにおける今日的動向を探ることを目的とする。おおむね過去 10 年間にわたる精神医学、心理学関連の文献を振り返り、各テーマに従っていくつかに区分して取り上げることとする。その中からロ・テスト研究に関する今日的な動向が見

出されることを目指す。

なお、本稿では、ロ・テストに関する研究動向に焦点を当てるものであるため、おのおの研究で用いられている統計手法に関する記述は最小限にとどめ、主に各研究の内容面を中心に取り上げることとした。また、スコアリングに関しては可能な限り記載し、各反応の意味や各図版の特徴など詳細については省いている。

2. 既存のスコアリングと解釈の妥当性及び信頼性に関する研究

ロ・テストに関する諸研究の中で、1つの明確な領域を作っているのがそのスコアリングと解釈の妥当性と信頼性に関するものである。Rorschach (1921) が『精神診断学』を記したことでロ・テストは一応の完成を見たものの、その後、彼が 37 歳で夭折したことで理論的裏付けやその後の展開が後世に委ねられることとなった。そのため、この分野では多くの研究が継続して行われてきた経緯がある。

高瀬と佐藤 (2005) は、片口法における今までの P 反応の出現率について検討を行っている。その中で、

1) 久留米大学大学院心理学研究科
2) 久留米大学文学部心理学科

I 図版の「顔」、IV 図版の「怪獣」あるいは「巨人・大男」、VI 図版の「弦楽器」、X 図版の「顔」等従来の P 反応リストには存在しない、出現頻度の高い内容を確認している。この研究の被験者の平均年齢が 24,1 歳と比較的若い世代が多く含まれていることから、花や毛皮といった自然や自然の素材を活かした加工品などが減り、怪獣や怪人と言ったテレビやテレビゲームを連想させる内容のものが増えたとして、P 反応は時代の推移とともに変化していくことを示唆している。飯野 (2006) は、陰影反応の下位カテゴリーである材質反応の中でも Fc に着目し、そこに想定される体験のあり方について検討し、その背景に想定される体験の 1 つの様相として、情緒的底流への感受性の高さを基礎とし、たびたび安全感の確認をせざるをえない強い探求の態度を示唆している。この陰影反応に関する研究では、大貫ら (2008, 2009) が非患者群ではあるが、その基礎データを示している。

また、ロ・テストはその特徴から数値化されたスコアのみならず、それ留まらない質的な研究もなされている。寺崎 (2008) は、高校生のロールシャッハ反応について、特に M 反応と FM 反応の特徴を質的に検討している。そこから、これまで臨床的な知見として示唆されてきたように M 反応の数が多ければよいというわけではないこと、高校生においては成人に比べて M 反応の産出が少ない可能性があり、M 反応が少ないことが必ずしも病理や不適応を意味しないこと、GHQ 得点の低い被験者には FM 反応が多く見られ、良い反応の重要性が示唆されたことを挙げ、比率や数のみを問題にするのではなく、質や継列について吟味することの重要性を示している。

一方で、既存のスコアリングから新たなスコアリングの提唱や適応領域の拡大を試みる研究も数多く存在する。高瀬 (2005) は、M 反応を外面型 (「跳ぶ」・「踊る」といった目に見える筋肉運動を意味するもの)、内面型 (「考える」・「感じる」といった精神活動を意味するもの)、複合型 (「楽しそうに踊る」・「怒りにまかせて叩く」) の 3 つに分類し、更にそれを active-passive (積極—消極) の視点から計 6 つの組み合わせで検討している。被験者は不安障害患者群、境界性人格障害患者群、統合失調症患者群が選ばれている。結果は、不安障害群は外面型 M 反応の多さから現実吟味の機能に大きな問題がないこと、統合失調症群は「祈る」「愛する」などの内面型 M 反応の多さから、インクプロットの形態に直接基づくものではなく自らの感情や願望の赴くままに世界を把握する傾向があることを示

している。また、active-passive の次元からは、境界性人格障害群の特徴である、人物像の活動に過剰な意味づけをしがちであることも示している。白井ら (2009) は、包括システムを用いて、それまでの研究を基にしたより詳細な特徴の解明を目指した幼児の反応領域と反応内容を報告している。その中で、各図版における特徴を示しており、包括システムにおける P 反応の基準を満たしたのは V 図版の「コウモリ」のみとしている。最後に、日本では幼児の知覚の個人差が大きく、包括システムのデータとは大きな開きがあるとして、これらを踏まえた上で実施をすることが重要であるとまとめている。

福井ら (2008) は父親的・母親的カードの選択について性差を含めた検討を行っている。その結果、性別にかかわらず、IV 図版は他図版と比較して圧倒的に男性的・父性的であると評価されたが、よく母親として見られる VII 図版はそうではなかったとしている。また、主成分分析やクラスター分析を用いて図版を分類した結果、IV 図版は男性的・父性的であり、I、VI、IX 図版は中性的、II、III、V、VII、VIII、X 図版は女性的・母性的な図版であること示し、従来の仮説を一部実証するものとなった。また、安田 (2010) は、包括システムにおいて図版の向きに伴う反応を検討している。これらは、どのように見えるかを捉えるだけでなく、それに付随する認知や動作もロ・テストの特徴であり、研究範囲となりうるものが伺える。

3. DSM における精神疾患やその他の疾患との関連する研究

以上のような既存のスコアリングと解釈の妥当性及び信頼性の検討がなされてきた経緯とともに報告されている研究が、DSM に記載されている精神疾患やその他の心的障害がどのようなスコアや反応を示すのか、どのようなプロトコルを見せるのか、あるいは、どのような解釈が必要になるのかといったことに焦点を当てたものである。ロ・テストが確立されて以降古くから続いているが、DSM における診断基準が確立されて以降その頻度を増している。

その基本的概念をまとめたものとして、わが国では片口 (1987) の『改訂 新・心理診断法』の IV 部臨床的適用 (p246-p378) がよく知られている。精神神経症、精神分裂病、躁うつ病、知的欠陥と器質精神病、非行・犯罪、同性愛等のスコアを詳細に記している (原文ママ)。片口法のみならず、近年では包括システムにおいてもその広がりを見せている。

これらは、大規模な調査研究のようなものから、個別の患者やクライアントを対象とした事例研究や効果研究までその幅は広く、また、統合失調症 (Schizophrenia) をはじめ、人格障害 (Personality disorder)、近年では摂食障害 (Eating disorder) や解離性障害 (Dissociative disorder) など様々な領域と疾患に対して用いられている。

村上 (2009) は、統合失調症犯罪者の認知について、司法精神鑑定に付された 40 名のロ・テストの結果を用いて検討している。その結果、片口法の修正 BRS が病型によって異なることを明らかにしている。形態の崩れは解体型が顕著であり、形態の崩壊が言語連合の弛緩につながる可能性を示唆している。また、明確な誘因なく生じた犯罪においては明らかな質的論理構造変化 (思考障害) が存在し、統制の欠如した感情反応性が犯罪生起の間接誘因となった可能性を示している。さらに、病識が欠如した場合には、感情的に不安定になり、一方で病識がある程度ある場合には適応的であることが示されている。

DSM-III の登場以来、人格障害の状態像が明らかになるにしたがって、人格障害のロ・テスト研究もなされるようになった。堀口 (1999) は、DSM-IV の分類にしたがって人格障害及び解離性同一性障害の海外のロ・テスト研究をレビューしている。クラスター A の人格障害は思考の病理、クラスター B の障害は対人関係の病理が明らかにされ、クラスター C の障害を扱った研究は少なかったとしている。これらの 3 つのうち、最も研究が行われているのはクラスター B の人格障害であった。反社会性人格障害の反社会的行動や境界性人格障害の衝動行為などは、主に対人関係での問題に直結する。そのため、多くの臨床家が悩まされており、研究の大きな原動力となっているとしている。今後は、それらの留まることない診断・判定が行える定量的な研究や、複数の人格障害の合併症と単一例の研究が求められると結んでいる。

摂食障害に関する研究は海外ではなされることが多かったが 1980 から 90 年代以降、わが国でも問題とされるようになり多くの研究が見られるようになり、それに伴いロ・テストでも数多く報告されている。原田ら (1998) や佐藤ら (2006) は、摂食障害患者のスコアを明らかにすることだけでなく、ロ・テストの特徴を生かし、その人格傾向を明らかにしようとするものである。前者では全 48 名のロ・テスト結果をクラスター分析によりグループ化し、人格特徴と摂食障害の臨床症状との関連を検討した。その結果、2 群に分類

され、1 つは摂食障害患者に共通する特徴であり、もう 1 つは境界人格構造であることを明らかにしている。後者に関しては、病型による分類に加えて、それらの臨床症状を体重減少率、摂食減少度、過食頻度、嘔吐頻度、過食頻度、下剤使用量の 5 項目を数値化し、各点数とロ・テストの各因子の相関を求めている。その結果、拒食は協調性の乏しさや葛藤の強さに相関し、過食は自発性や情緒統制の乏しさと相関することを明らかにしている。また、従来同じと考えられてきた嘔吐と下剤乱用に関しては異なる人格構造である可能性を示唆している。

摂食障害と同様に解離性障害についての研究も同様に報告されるようになってきている。堀口 (2000) は解離性障害、とりわけ解離性同一性障害の今までのロ・テストの研究結果をレビューしている。決定因として FK 反応、M 反応などが多く、反応内容としては BI 反応、At 反応、Hd 反応が多いことを述べており、分裂 splitting の機制が働いていることを明らかにしている。青木 (2009) は、包括システムにおいて心的外傷性の解離について詳細なスコアを表している。解離の有無という点から心的外傷性障害を有する者を 2 群に分け、その心的特徴を比較し、両群に過剰な情報処理努力 (Zf の高さ)、否定的な状況認識や自己・他者認知 (PHR の MOR 多さ)、現実検討力の低さ (X + % の低さ) の 3 つの状況を挙げている。解離を持つ心的外傷群では、状況を細かく複雑に捉えるが情報の統合に歪曲が多く、認知や思考、情動の混乱が多く認められたが (DQ +、複雑な blend 反応、特殊スコアの多さ)、解離を持たない群では自らの心的外傷が自分の記憶に統合されない可能性を示唆している (DQ が少ない)。

また、吉野ら (2008) は、DSM-IV-TR に従い性同一性障害 (Gender Identity Disorder : GID) と診断された患者 82 名の心理的特性と防衛のあり方を検討している。その中で、物事を詳細に見たり関連付けたりすることが少ない傾向があり、現実検討の低下が見られたことや、他者への関心の薄さの背景に否定的な自己像を持ちやすい傾向があること、不快な状況に屈することなく問題解決に尽力する積極性の 3 つを明らかにしている。

4. 発達障害に関連する研究

注意／欠陥多動性障害 (Attention Deficit/Hyperactivity Disorder : AD/HD) や広汎性発達障害 (Pervasive Developmental Disorders : PDD) に代表

される発達障害は、学級崩壊への直接的あるいは間接的な影響や、不適応から生じる不登校、いじめに発展するケースなど様々な問題が生じている。それらに対して学級への適応の問題や適切な支援方法の確立など近年の学校臨床現場では大きな課題とされている。これらの山積した課題に対して、主として2000年以降ロ・テスト研究は徐々に高まりを見せている。

前田と鹿島(2005)は、これら発達障害の特徴として、病因論的に均質でなく、症状に関しては基本的障害が対人相互関係や情緒面などの質的な側面を持っていることが挙げられるので、客観的・数量的には捉えにくいとしている。そのため、基本的な診断は行動観察が主になるので、質的な検査を可能とするロ・テストの導入を試みている。認知的側面に関しては、1つの図版に1つの見方しかできないため柔軟性に乏しく、明細化が不十分な漠然とした反応や固執した反応が多いとしている。また、情緒的側面に関しては、色彩への反応性が一般的に低く、言語表現に関しても情緒表現の少なさがあり、M反応の少なさを挙げている。

また、事例研究となるが、高橋と神尾(2008)はアスペルガー症候群の事例をもとに、高機能自閉症とのロ・テスト上の相違を検討している。両方の事例で「知覚的距離感の喪失」が見られ、特に高機能自閉症の方が顕著に見られたとしている。また、アスペルガー症候群は片口法で言うところの「情緒的距離感」の問題が見られ、より刺激に反応しやすいが、その反応継起に伴う、立ち直りが捉えにくいとしている。柳澤と今田(2003)は、AD/HDの衝動性に関するロ・テストの結果をレビューし、衝動性をM反応とC反応の2つの側面から相対的なバランスによって解釈が出来る可能性を示している。

この分野では、一応のスコアは示されているが、その多くは事例研究やレビューなどで占められており(櫻井, 1998 伊達, 2005 鈴木ら, 2010)、いずれの研究においても今後の課題として大規模な研究が待たれていると締めくくっている。

5. ま と め

以上のように、最近のロ・テストの研究動向を概観してきた。ここに記載出来なかったものも含めると研究数はかなりの数が含まれ、病院臨床に留まらず、学校臨床においても活用されていることが分かった。また、色彩心理学(金澤, 1999)やスポーツ心理学(坂中, 2010)など臨床心理学の領域から新たな領域への

応用も見られ、その幅を広げている。その広がりや、時代のニーズに答える形で変化していき、スコアリングに関しては既存のスコアを再検討したものや新たな基準の作成を試みたものが見られた。また、摂食障害や解離性障害など時代を反映した疾患を取り上げることが多くなっており、近年では発達障害への応用も見られている。

今後もロ・テストはその特徴を生かしながらも、ニーズに応じて変化していき、活用の幅を広げていくものと思われる。

文 献

- 青木佐奈枝(2009). ロールシャッハ・テストに見られる心的外傷性の理解 心理臨床学研究, **27**(2), 129-139.
- 伊達奈央子(2005). 高機能広汎性発達障害者のロールシャッハ反応特徴 愛知学院大学文学部紀要, **35**, 234.
- 福井義一・三宅由晃・岡崎剛・森津誠・遠山敏・山下景子・岡田信吾・安藤治(2008). ロールシャッハ・テストにおける父親・母親図版解釈仮説の妥当性に関する研究 図版評定法を用いて 心理臨床学研究, **26**(5), 549-558.
- 原田真理・熊野宏昭・野村忍・久保木富房・末松弘行(1998). ロールシャッハ・テストによる摂食障害患者の臨床像の特徴についての考察 心身医, **38**(2), 143-152.
- 堀口寿広(1999). 人格障害のロールシャッハ・テスト研究 臨床精神医学, **28**(11), 1357-1363.
- 堀口寿広(2000). ロールシャッハ・テストによる解離性障害の理解 臨床精神医学, **29**(11), 1423-1429.
- 飯野秀子(2006). ロールシャッハ法の陰影反応における体験様式についての一考察 京都大学大学院教育学研究科紀要, **52**, 160-173.
- 金澤律子(1999). 色の原基性—ロールシャッハ・インクプロットによる色彩実験の試み 日本色彩学会誌, **23**, 60-61.
- 片口安史(1987). 改訂 新・心理診断法 金子書房.
- 前田貴記・鹿島晴雄(2005). 広汎性発達障害のロールシャッハ・テスト—統合失調症との鑑別 Schizophrenia Frontier, **6**, 199-204.
- 村上千鶴子(2009). 統合失調症犯罪者の統計学的ロールシャッハ分析: 認知と気分の観点から 日本橋学館大学紀要, **8**, 15-26.
- 小川俊樹・野坂三保子(2004). 投影法(ロールシャッ

- ハ・テスト等) 臨床精神医, **33**, 400-404.
- 大貫敬一・沼初枝・佐藤至子 (2008). ロールシャッハ・テスト陰影反応の基礎データ-材質反応と接触感覚-ロールシャッハ法研究, **12**, 23-33.
- 大貫敬一・沼初枝・佐藤至子 (2009). ロールシャッハ・テスト陰影反応の基礎データ-展望・拡散反応と体験的性質- ロールシャッハ法研究, **13**, 10-17.
- Rorschach, H. (1921) Psychodiagnostik: Methodik, und Ergebnisse eines wahrnehmungsdiagnostischen Experiments. Deutenlassen von zufallsformen. Bern: Ernst Bircher. (鈴木陸夫訳 (1999). 新・完訳 精神診断学 付 形態解釈実験の活用 金子書房)
- 坂中尚哉 (2010). スポーツ競技者のパーソナリティ心性に関する一考察-ロールシャッハ反応の体験型を手掛かりにして- 関西国際大学研究紀要, **11**, 147-154.
- 櫻井秀雄 (1998). アスペルガー症候群症例の遊戯療法によるロールシャッハ上の変化 日本教育心理学総会発表論文集, **40**, 365.
- 佐藤晋爾・山口直美・太刀川弘和・小林純・朝田隆 (2006). 摂食障害の人格傾向と臨床症状との相関-ロールシャッハ・テストの結果から- 臨床精神医学, **35**(8), 1127-1132.
- 白井博美・松本真理子・鈴木伸子・森田美弥子・坪井裕子・畠垣智恵 (2009). ロールシャッハ法における日本人幼児の反応内容と領域 心理臨床学研究, **27**(3), 365-371.
- 鈴木明子・吉野真紀・内田良一・上野千穂・木下利彦 (2010). 広汎性発達障害のロールシャッハ・テストにおける特徴-再検査を通して- ロールシャッハ法研究, **14**, 18-25.
- 高橋靖恵・神尾陽子 (2008). 青年期アスペルガー症候群のロールシャッハ 高機能自閉症との比較検討 心理臨床学研究, **26**(1), 46-58.
- 高瀬由嗣・佐藤洋一 (2005). ロールシャッハ・テストにおける平凡反応の再検討 北海道医療大学心理科学部研究紀要, **1**, 11-22.
- 高瀬由嗣 (2005). ロールシャッハ・テストの人間反応にみる精神病理の特徴 北海道医療大学心理科学部研究紀要, **1**, 1-10.
- 寺崎文香 (2008). 高校生のロールシャッハにおける M 反応と FM 反応の質的研究 心理臨床学研究, **26**(4), 420-431.
- 柳澤明美・今田里佳 (2003). ロールシャッハ・テストによる衝動性の研究-注意欠陥/多動性障害の衝動性研究の理論的検討- 信州大学教育学部紀要, **109**, 113-124.
- 安田傑 (2010). ロールシャッハ図版の向きにともなうコードの産出率の検討-領域・発達水準・決定因子の考察を中心に- ロールシャッハ法研究, **14**, 35-42.
- 吉野真紀・中平暁子・織田裕行・鈴木明子・田近文・有木永子・木下利彦 (2008). ロールシャッハテストからみた性同一性障害 日本人一般成人との比較 心理臨床学研究, **26**(1), 13-23.

Recent trend in research related to the Rorschach test

SHO TENMA (*Graduate school of Psychology, Kurume University*)

MIKIO HIDAOKA (*Department of Psychology, Faculty of Literature, Kurume University*)

Abstract

The objective of this study is to examine the recent trend in research related to the Rorschach test. When we examined documents on psychology and psychiatry published in approximately the past 10 years, as a main study theme, the Rorschach test was studied in relation with the validity and reliability of scoring and interpretation, a mental disease and a disease related to it in the DSM, and developmental disability. In addition, it was observed that the recent trend is shifting from clinical psychology to its application to a new category. This trend has widened the practical use of the Rorschach test. The expanse changes in form in response to the needs of the times.

Key words: Rorschach test, scoring, validity and reliability, developmental disability